

主イエス命名の日

2012/1/1

聖ルカ福音書第2章15節～21節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。

昨年は、未曾有の東日本大震災とそれに伴う大津波、そして福島原発事故が起こり、多くの方々が犠牲となり、また被災され、そして今なお、避難生活を余儀なくされている人たちがおられるという、深い悲しみの出来事を体験致しました。

今年は、そこからの復興・復旧、どのように立ち直っていくかということが、大きなテーマとなることでしょうか。教会としても引き続き支援の働きをしていかなければならないと思います。

ところで、あの大地震の日以来、自分の生き方を見直し、生き方を新しく変えようとしている人が多くなっていると聞きます。先日もある方とお話ししていて、地震の後に古本屋さんが大忙しだったとか聞きました。それは古本が売れたということではなくて、家にある本を整理するために売る人が増えて、そのために古本屋さんはフル稼働しなければならなくなったということです。特に大型の本が沢山出て、今はもう引き受けてくれないという話でした。そんなことがあるのだろうか、と思いつつ聞きました。

また昨年は、「断捨離」という言葉も、流行りましたが、震災がそれに拍車をかけて身の回りの物を徐々に整理していこう、物に執着することから解放された生活を送ろうという生活態度が人々の関心を呼んだことは間違いのないことでしょう。そう言えば、テレビで放映されていましたが、還暦を少し超えたくらいの年配の女性が、震災以来、今まで大事に取っておいた子どもの思い出の品々を、やはり整理している映像が映されていました。これからは品物を大事にするのではなくて、子どもとの関わりをもっと深め大切にしていきたいという趣旨の話をしていたことが印象的でした。いつ何時、何が起こるか分からない。大事にしていた物もあつとい

う間に失われてしまう。そんな出来事を身近に見聞きして、自分が大切にしなければならぬことは何なのか、自らに問い直したのだと思います。

毎年暮れになると、「今年の漢字」が公募されて、発表されています。その年がどのような年であったか、世相を表すような漢字一字が選ばれます。清水寺の偉いお坊さんが力強く書く姿がテレビのニュースで放映されます。昨年は、なんという字が選ばれたか、覚えていらっしゃるでしょうか。「絆」でした。大きな災害に遭って、家族や友だちとの絆の大切さ、励まし合い助け合ってきた人と人との絆がいかに大切かを身をもって実感した人が多かったのだと思います。人と人との交わり、結びつき、共同体の中でこそ、人は生きることが出来るのだということを、改めて思い知らされたのではないのでしょうか。

「寄り添う」という言葉も頻繁に用いられ、しばしば耳にした言葉です。辞書には、「体をすり合わせるように、すぐ近くに位置する。すぐ近くに身を寄せる」とあります。物理的にすぐ側にいるというだけではなくて、そのお相手の心を自分の心としながら一緒に歩む姿を言い表している言葉でしょう。相手の気持ちを受け止めなければ、物理的にも寄り添うことはできません。

話は変わりますが、北海道教区では、毎年、1つの聖句を選んで、それをその年の宣教の標語として掲げています。どなたかが揮毫した聖句を印刷して各家庭に配布しています。きっとそのみ言葉を毎日、目にしながら黙想し、信仰生活を送るよすがとしておられるのでしょう。目にするだけではないと思います。そのみ言葉を生きるために、自分のあり方をどのように整えたら良いか、思い巡らしつつ、日々を送っていることでしょう。

今年の宣教の標語に選ばれた聖句は、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に涙を流す」というみ言葉です。ローマの信徒への手紙の中のパウロの有名な勧めの言葉です。通常、このみ言葉は、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と命令形で訳される場合が多いのですが、それを「泣く人と共に涙を流す」と訳しています。このような訳が可能なのかどうか、わたしには分かりませんが、聖書のみ言葉

を、敢えてこのように訳し変えることをしてまでも、訴えたいことがきっとあるのだと思います。

わたしの推測では、誰かに命令されて、悲しみの中にある人と初めて一緒に泣くのではなくて、「相手の身の上で起こったことを、真実の共感と同情をもってわがことであるかのように受け止める」(NTD新約聖書註解)ような姿勢が、信徒一人一人の中に形作られることを願って、このような言い方にしたのではないかと思います。わたしたちは、泣く人と共に涙を流すような交わりを作っていくのだ、そのような交わりの中へイエスさまに招かれているのだ、それが教会なのだという思いを読み取ることができるのではないのでしょうか。そのようにして「寄り添う」という言葉の中身を実質のあるものにしていきたいという、切なる願いを感じ取ることが出来るように思います。

大地震が発生してから、キリスト教の各教会は救援活動のために現地に拠点を作り人を派遣して支援活動を続けています。わたしたちは、聖公会の「いっしょに歩こう」プロジェクトの働きを通して、何カ所かの拠点での活動を支援し、またその報告を聞いていますが、他の教会の働きについてはあまり、あまり知りません。

『本のひろば』というキリスト教関係の新刊書の書評を専門としている小さな月刊誌がありますが、昨年11月号に、ルーテル教会の事務局長をしている牧師さんが、ご自分の被災地での活動を巻頭言に書いていました。ルターの『キリスト者の自由』という本がありますが、その中の、「となりびとに対して、私も一人の小さなキリストになる」という言葉と絡ませて、被災された方々の体験や思いを聞くことの中から、「小さなキリストになる」ことはどのようなことなのかを綴っています。

津波で流された孫を破壊された小学校に探しに来て、赤いランドセルをやっと見つけたおばあちゃんのこと。また、家を流されて、何もかもなくなったおばさんのこと。孫が一人は見つかったけれど下の孫はまだ見つからずにいて、牧師さん、き

っと見つかるよねと訴えるおじいちゃんのこと。この牧師さんは、辛い思いを抱きながらこれらの話を聞いたのでしょう。

叫びながら流されていく家族や友人をただ見つめるしかなかった人たちに対して、何ができるのか、何を語ることが出来るのか。何もできない。苦しみや痛みを担うこともできない。ご自分にできることは何か、それを問いながら活動して来られたのでしょうか。「小さなキリストになる」ために、一人一人を訪問し、必要なものを聞いて、用意できる限りの物を持っていくという直接の支援をするほかないと考え、実行して来られたのです。

あるとき、訪問したお家での体験を書いています。「あんたら何持ってんのか」と聞かれたので、「何も持ってません。だけど必要なものがあればできる範囲でそろえます」と応えたそうです。すると「おらなんにもいらねえ。ただあんたらくると元気になるべ。あんたらキリストさんしょってるからな」と言われたそうです。

何もなくても、キリストを持っている。そのことを教えられた。キリストを持っている。それこそが、「小さなキリストになる」ことだと言っています。自分は何もできない。だけれどもキリストがここに立っておられる。キリストが被災された方々に寄り添っておられる。「ランドセルを横に置いたおばあちゃんの隣にキリストが見えた瞬間でした」と書いてその文章を締めくくっています。

自分が、被災者に寄り添わなければならない。その使命感に支えられて活動して来られたのでしょうか。教会の期待を一身に背負っているわけですから、それに応えなければならない。そればかりではなく、ほかの宗教団体やNPOなどのボランティアが沢山、現地に入り込んでる中で、教会独自の働きをあらわにしていくことで存在意義を示したいという気負いも全くなかったわけではないと思います。「小さなキリストになる」ことを目標に、精一杯、誠実に頑張っておられたのでしょうか。

そこで教えられたことが、「あんたらキリストさんしょってる」ということでした。そのことに、自分でも気付かなかった。気付かなかったから、自分に与えられた使命を遂行することで、「小さなキリストに」なろうとした。そのために、でき

る限りのことをしようとしたのでしょう。しかし、自分が、そうあろうとする以前に、おばあさんの目には、この牧師さんがキリストをしょっていることが見えたのです。そのキリストを見て元気になれたのです。

今日は、イエスさまが生まれて8日目に割礼を受けて、イエスと名付けられたことを記念し祝っています。イエスという名前は生まれる前から天使によって示された名前です(マタイ1:21)。「ヤハウエは救いである」という意味の名前です。イエスさまによって神さまの救いのみ業が成し遂げられたことを表しています。その神さまの働きに、教会は仕えるものでなければなりません。自らが己の意思で何かを行なうのではなくて、常にキリストを指し示すことが教会の働きです。

今年1年間、わたしたちの教会の働きが主の祝福と導きの下に行なわれますよう、祈り求めたいと思います。